

その後の質疑応答では、可能性があるものはすべて八重山焼としていく姿勢は、いまいちど厳密に精査すべきではないかという指摘や、八重山でも大いに生産された瓦との関係、あるいは商品の流通ルートとの関係から、今後どのような展開が可能かという質問があった。また、八重山焼の特徴である非常に重いということについて、それはなぜかという質問がなされた。それには土を単味で使うと重くなるといわれているという回答がなされた。

時間の都合上文化講座は閉会したが、閉会後も積極的に質疑応答が為されていた。

# 八重山古陶を考える

田野多 榮一

## 1 「八重山古陶—その風趣と気概—展」をみて

2007年、「八重山古陶—その風趣と気概—」展が東京の早稲田大学會津八一記念博物館を皮切りに、那覇市立壺屋焼物博物館、そして石垣の大浜信泉記念館で開かれた。この展示会の特徴は、釉薬が塗られた上焼の伝世品が発掘された陶片と共に見ることが出来たことである。八重山の古陶は、今まで荒焼は知られていたが、上焼はほとんど目にする事はなかった。出土した上焼の陶片は、八重山の古窯跡から掘り出したものだという。湧田焼と見違える程そっくりなものがあった。伝世品を見てみると、私が湧田焼と思っていたものや、喜名焼、古我知焼と見まがう品々が展示されていた。伝世品の土や形、雰囲気から判断して八重山焼だと識別したという。しかし、今までに八重山の古窯から発掘された上焼の陶片は、陶片全体の1パーセントに過ぎないとのことである。展示会の期間中におこなわれた石垣市教育委員会の阿利直治氏の講演を聞いても、疑問点は深まるばかりであった。「風趣と気概」と云うサブタイトルが付けられた展示品は、みな美しくすばらしいものばかりであった。八重山の人でなくとも、もしこれらが本当に八重山で作られたものなら沖縄の焼き物の歴史に新しい1ページを加えるに違いないと思われた。それ程展示会は、刺激的であり沖縄全体の古陶を考える上で、良いきっかけを作ってくれたと思う。これらが本当に八重山焼かどうかを判断するためには、沖縄本島にある古陶、湧田焼、喜名焼、知花焼、古我知焼、壺屋焼やその他の古陶がどんなものかを知っておく必要がある。比較出来るからである。しかし、残念ながら沖縄本島全体の窯跡や出土品の調査が十分になされているとは云えないので比較の仕様が無いのである。八重山も古窯の調査が十分でなく、まだよくわかっていないのを感じる。出土した陶片の科学的分析もなされていないようだし展示されていた伝世品が八重山で作られたものだとされてもすぐには信じられないのである。八重山焼の特徴とは何なのか。重たいとか長石や珪石が含まれているとか釉薬が剥げているとか形や雰囲気が八重山であると言われても、やはりまだ分からないのである。気概のあるすばらしく美しい焼き物が実際には作られていて、これらが八重山焼だと云われても、そうありたいという願望や思い込みが強すぎる結果、八重山焼だとしているのではないかと思ってしまうのである。

---

たのだ えいいち：（壺屋やちむん通り会元会長、古美術 壺や 店主）

## 2 八重山の焼き物の歴史

仲村渠 致元 「唐名、用啓基」 (1696-1754)

残されている文献から八重山の焼き物の歴史をたどって見る。最初は、瓦を焼いていた。それから30年後の1724年11月に王命で、仲村渠致元が八重山に来島し、山田平窯(阿香花窯)を開き壺や上焼の作る方法を島人5、6人に伝授した。致元は、八重山に3年間滞在してから那覇に帰った。その時八重山で致元が作った上焼の作品を王に献上し、ご褒美をもらったとある。

致元は、朝鮮系の陶法を学んで育っているのだから、上焼は得意だったのだろう。八重山でも白土をはじめよい土を探して上焼作りに精魂を傾けたに違いない。それらがどのようなものだったかは、その頃の作品が残っていないのでよく分からないが、3年弱という短期間の滞在であったとはいえ王に御覧いただくものができているくらいだから、かなりのレベルの域にまで到達していたのではなかろうか。以前、阿香花古窯近くで致元が滞在していた時期と重なる、雍正4年銘の陶片が出土して話題になったが、それが、致元が作ったものと関係があるのか、湧田焼や喜名、古我知焼に似た出土陶片と比べて同じなのか違うのか明らかにしていただきたいと思う。

仲宗根 喜元 (1700-1764)

八重山に関係の深い陶工として致元の他に、もう一人仲宗根喜元がいる。

喜元は、もと越来間切大工廻村の農家の生まれであったが、平田典通の子平田典寛を師として磁器及び五色玉等の焼法を学び、38歳の頃には平田家伝の陶法を継承するに至ったとされている。喜元は晩年、単身八重山に赴き白保に窯を築いた。そして、白保と宮良の人数名に陶法を教えた。喜元は、この地で再婚して3男をもうけている。居住していた家を中宗根屋といい、65歳でこの地で没したという。喜元が八重山に行ったのは致元が来島した時より30年も後のことであるが喜元の指導による窯業は、相当大きな事業として行われていたらしい。致元が開いた八重山陶業をさらに発展させていったものと思われる。喜元の商品がどんなものかわからないが、当時の製陶及び瓦製造に関する文献、蔵元本「八重山島壺瓦方例帳」によれば、壺類、摺り鉢、徳利、火取、酒器、花活、茶碗、瓶、香炉など、かなりのものが作られていたことがわかる。中宗根喜元が八重山に来る以前、沖縄本島で焼き物を作っていたころ、多年の功により御褒美として王府より新家譜を賜り、土籍に抜擢されているくらいだから致元に劣らず相当な名工であったと考えてよいのではないかと思う。

喜元に指導された島の人々や喜元の子孫によって八重山の焼き物は明治近くまで作られていたのではなかろうか。その頃つくられた八重山焼が、伝世品として現在まで残っていることも十分に考えられることである。その窯跡は何処なのか、どんなものが出土しているか、又、伝世品ならどのようなものが残っているのか是非知りたいところである。

### 3 八重山の古陶について

展示された八重山古陶の伝世品が、湧田焼を初め喜名焼や古我知焼など沖縄本島の古陶とあまりに似ているので、本当にそうなのか、あらためて検証し直す必要があるではなかろうか。

私が所蔵している湧田焼の渡名喜瓶や碗、古我知焼の褐釉徳利は、展示品とそっくりなのがあるが、これらも八重山焼であろうか？

形について言えば、東南アジア産の古い焼き物に瓢箪型が多く見かけられるが、東南アジアに近い八重山がその影響を最も受けている事は、十分に考えられることで特徴の一つであると思う。

いずれにしても、今一番求められていることは、事実の正確さではなかろうか。

#### 【主な参考文献】

『八重山古陶—その風趣と気概—』 大谷芳久 丹尾安典 図録編集

『沖縄文化の遺宝』 鎌倉芳太郎 著



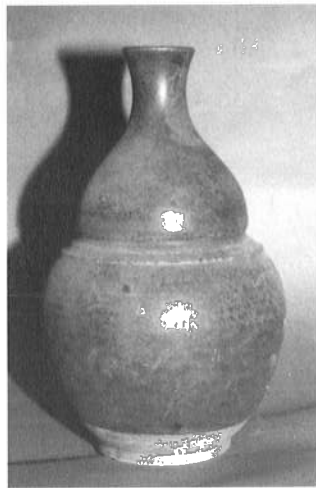
渡名喜瓶 湧田焼



褐釉徳利 古我知焼



八重山焼



東南アジア産の古陶（クメール）



県庁の敷地で発掘された湧田古窯跡

## 壺屋焼物博物館紀要

第9号

---

発行年月日：2008年3月28日

編集・発行：那覇市立 **壺屋焼物博物館**

〒902-0065

沖縄県那覇市壺屋 1-9-32

TEL (098)862-3761

FAX (098)862-3762

<http://www.edu.city.naha.okinawa.jp/tsuboya/>

印 刷：株式会社国際印刷

〒901-0147

沖縄県那覇市宮城 1-13-9

TEL (098)857-3385

FAX (098)857-3892